内外交差点

女性希求が世界的潮流？「安全配慮義務」で体制構築を

大久保　恵美氏　（兵タ協副会長）　第３／12回

コラムの執筆にあたり、世界各国のタクシー事情を調べました。各国ともに住民の大事な移動の足であることに変わりはないことが分かりました。注目したいのは、どの国にも女性乗務員がいるものの、割合はすごく少ないということと、女性乗務員は利用者にとても人気があるということです。どこの国も自国の（ライドシェアを含む）男性ドライバーによって性被害にあったり、危険な目にあったというケースが少なからず報告されていることが背景にあると思います。例えば、2018年に中国で女性客がライドシェア車両に乗車後30分以内に暴行・殺害された事件が起こり、インドのデリーでは女性の42％が不安を感じ、43％が安全を脅かされたことがあると調査に答えています。オランダでも５人に２人が男性ドライバーと接することに不安を感じ、ラテンアメリカでは10人中９人が公共交通利用時に性的被害に遭遇した―とそれぞれ報じられており、特にライドシェアによる問題点は枚挙にいとまがありません。そのため、各国で女性タクシー乗務員を増やすことが求められています。

2009年に米・シリコンバレーでウーバーテクノロジーズが生まれたころから、そのような女性乗務員のタクシーや、女性・子どもしか乗せないタクシーやライドシェアがどんどんと開業しています。しかし、現状でそうした会社が増えていないのは、女性ドライバーが被害にあっていることが多いと見ることができるでしょう。実際に女性・子どもしか乗せなくとも、道路上で他のタクシー・ライドシェアドライバーから嫌がらせを受けたりしているようで、

そうしたインドの会社は「ドアをロックすることでしか防ぎようがない」と発表しているのです。また、イスラム圏の国は男性が運転する車に女性が乗ることが禁止されていました。サウジアラビアでは、ムハンマド皇太子の改革により、2018年６月から女性に運転免許を交付し、国策として女性の社会進出を図っているのが記憶に新しいところです。

こうした背景を総合的に判断すれば世界的な潮流として女性乗務員が求められていると考えられるのではないでしょうか？ヨーロッパなどでは、女性の利用者の好みやトレンドなどを把握して喜ばれており、労働市場としても、自由な働き方が歓迎されています。特に貧困女性などの自立支援策としても、役に立っています。ただ、海外のライドシェアも含む旅客自動車運送事業の事情として、車を自分で調達しなければならず、車をリースで買っても、カメラや防護板を付けるお金がない。タクシー会社にしても、わが国のように、全てが徹底できているわけではありません。

そうしたことから、女性によるタクシー会社は、続いていない状況があります。逆に言えば、日本のタクシーなら、安全面を担保することが可能になっています。私がハンドルを握っている時にも女性のお客様に喜んでもらえたケースが実体験としてあります。ゼロとは言いませんが、日本のタクシーは海外のような危険な状況にはありません。例えばウーバーでも強姦事件を受けて緊急ボタンが実装され、即座に通報することができます。他産業でも良いところを見習い、あともう一歩、みんなが進めば、女性だけでなく乗務員も守っていってあげることができるのに、なぜ、今まで守らなかったのか。

それは、「タクシーは男の仕事」で「危険はつきもの」と社会が捉えていることが原因にあるのではないでしょうか？それが男性も含めて乗務員不足に繋がっている理由の一つだと推測されます。現状は「酔っぱらっていれば、タクシー乗務員に暴言・暴言は良い」となってしまっています。そうした利用者はお客様ではなくただの犯罪者なので、逮捕すべき案件なのです。兵庫県警にもそのように指導を受けています。そうした風潮を許せば、いつまでたっても「タクシー乗務員は危険」という認識のままです。経営者として、われわれは「安全配慮義務」を果たすべきではないでしょうか。